

英国の謎

第3部 英国をつくるもの

第1部 ユニオン・ジャック（仮）

第2部 通貨と英連邦の謎（仮）

2000.10.24 札幌たの授サークル用レポート

2001.1.8 改訂

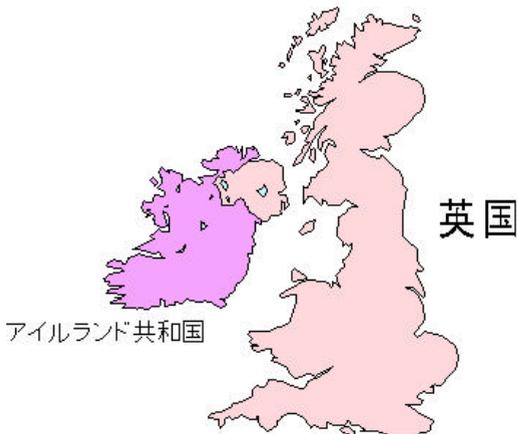
仮説実験授業研究会 丸山 秀一（北海道）

[質問]

英国（イギリス）の正式名称はなんでしょうか。

予想

- ア イギリス連邦共和国
- イ イギリス連合王国
- ウ そのほか

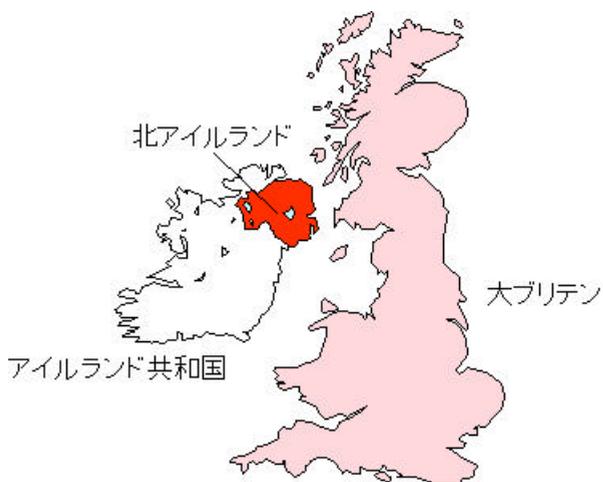


[質問]

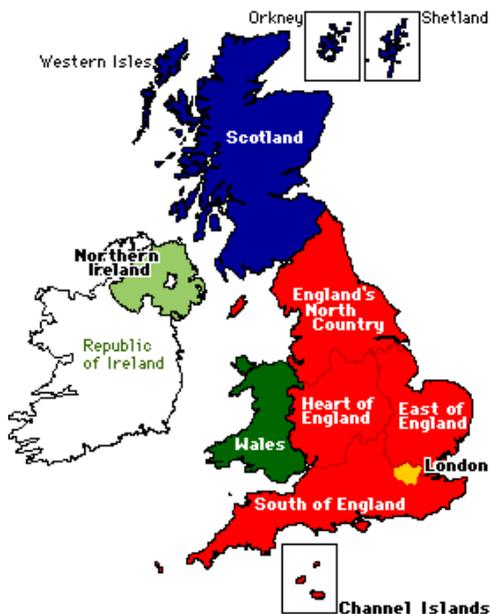
イギリスの正式名称は、「大ブリテンおよび北アイルランド連合王国」です。ではこの連合王国を構成する国はいくつあるのでしょうか。

予想

- ア 2 つ
- イ 3 つ
- ウ 4 つ
- エ そのほか



連合王国を構成する国



連合王国の正式名称「大ブリテンおよび北アイルランド連合王国」から単純に考えれば英国は「大ブリテン」と「北アイルランド」の連合王国と思えます。大ブリテン連合王国は、1707年にイングランド王国とスコットランド王国が一緒になってできたものです。とすると「今の連合王国は、イングランド、スコットラ

ンド、北アイルランドの各王国から成る」と考えてよいのでしょうか。実はもうひとつ、正式にはウェールズも含めた4つの連合体なのです。

[質問]

では連合王国の国旗や国王旗には、イングランド・スコットランド・アイルランドとともにウェールズのことも反映されているのでしょうか。

予想

- ア ウェールズの意匠も含まれている
- イ 全く含まれていない
- ウ 国王旗にだけは含まれている

国旗・国王旗ともウェールズの意匠は全く含まれていません。



連合王国旗



国王旗



イングランド



スコットランド



アイルランド



ウェールズの歴史

ウェールズは、ひとつの王国としての国家形態を整える前に、イングランド王国に併合されてしまったため、国旗や国王旗にはウェールズの意匠は含まれてはいません。

ウェールズは、歴史的にいくつかの小国に分かれていて、ウェールズ全体を統一するような王国はありませんでした。しかし 1230 年頃までにウェールズの一地方のギネス王国のルウェリン大王がウェールズの 3 分の 2 を支配しました。そしてイングランドは、1267 年にルウェリン 2 世に「プリンス・オブ・ウェールズ」(=ウェールズ大公)の称号を与え、彼をウェールズの君主と認めました。つまりウェールズは「王国」ではなく「公国 (prince が治める国)」になったのです。その後ルウェリンがイングランドへの忠誠の誓いを拒否したことから、イングランド軍が出兵し、ウェールズは 1282 年にイングランド王国にその全土を占領され、「イングランドの国外領土」とされました。そしてウェールズの謀反を防ぐため、イングランドのエドワード王は、プリンス・オブ・ウェールズの称号をルウェリンから奪い、自分の長男に与えました。それ以来、ウェールズはイングランドの男子王位継承者の所領となったのです。

ウェールズの人々は武器や土地を所有することができず、集会を禁止されたりなど、イングランドから徹底的に差別されました。そ



んなウェールズを救ったのが、1485年に即位したイングランド王のヘンリー7世です。彼はウェールズの出身で、ヨーク家との戦いのときにも、ウェールズの象徴である「赤い竜」の旗（現在ウェールズ国旗として認められている）を掲げて、ウェールズの人たちとともに戦いま

した。彼はイングランド王になっても母国を忘れず、ウェールズの守護聖人デーヴィットの祝日（3月1日）を祝うなどして、政府内にもたくさんウェールズ人を登用しました。そして彼の後を継いだヘンリー8世が1536年の「ウェールズ統合法」によりウェールズとイングランドを連合し、1543年には行政的にも一体とされたのです。これでウェールズ人は法的にイングランド人と対等となりましたが、ウェールズ語にかわり英語を強制されることになりました。そしてウェールズ人は、ウェールズの血を引く君主達に忠誠を示していきます。

現在も英国は男子王位継承者に、プリンス・オブ・ウェールズの称号を与えていますが、それは全くの形式的なもので、プリンス・オブ・ウェールズは、ウェールズの所有者でもなければ、統治もしません。この称号について、ウェールズ人たちは複雑な感情を持っています。

[質問]

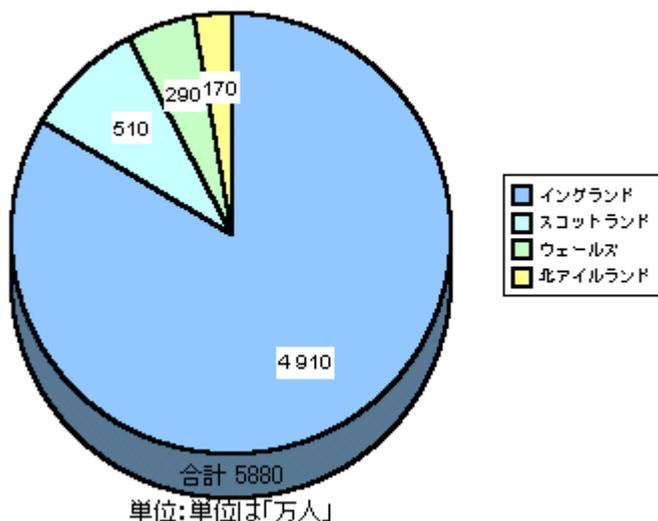
1996年の英国の人口は約6000万人で世界第18位です。そのうちイングランドの人口はどれくらいでしょうか。

予想

- ア 4000万人以上（英国全体の2/3以上）
- イ 3000万人くらい（半分）
- ウ 2000万人以下（1/3以下）

英国の地域別人口

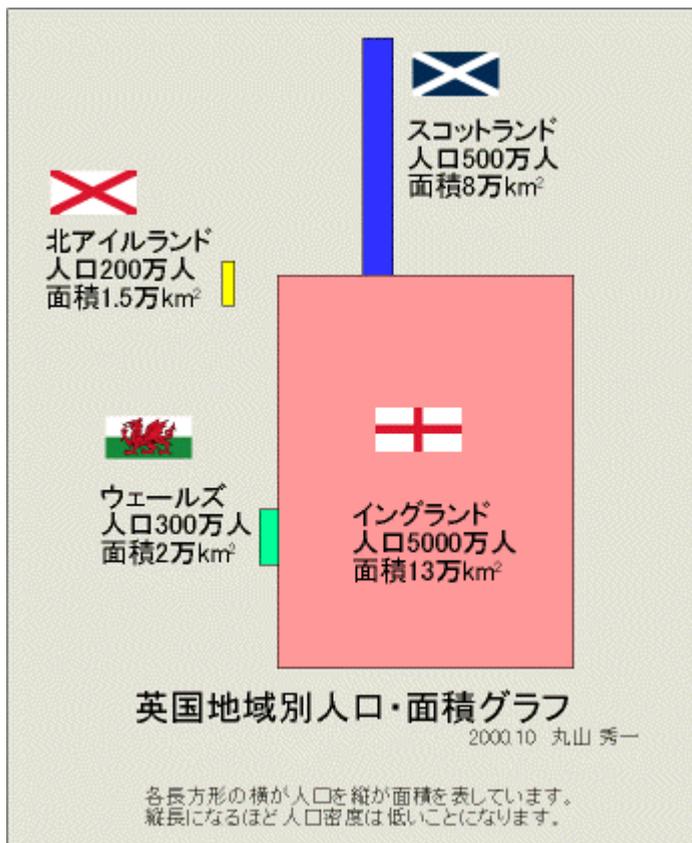
英国人口の地域別割合



イングランドの人口は約 5000 万人で全人口の 8 割以上です。あとはスコットランドが約 500 万人、ウェールズが約 300 万人、北アイルランドが 200 万人です。人口では、イングランド以外の地域はイングランドに全くかなわないのです。

しかし、イングランドの人口が多いといっても、「イングランドの面積が一番多い」というだけのことも知れません。そこで各地域の面積を調べて量率グラフを作ってみました。(次のページ)なるべく実際の地形に近くなるように配置しましたが、いかがでしょうか。

このグラフではそれぞれの長方形の横が人口比を、縦が面積比を表しています。また長方形が縦長になるほど「人口密度が低い」ということになります。このグラフを見ると、イングランドは人口、面積とも多いだけでなく、人口密度もずっと大きいことがわかります。「英国とはその大部分がイングランドである」という感じです。



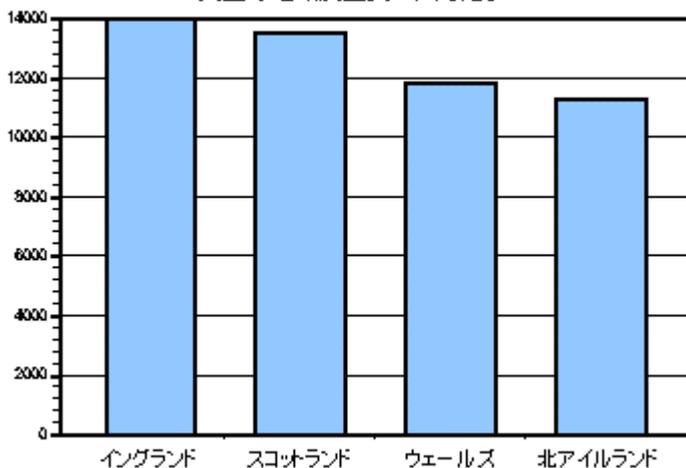
[質問]

英国の4地域の国民一人あたりのGDP(国内総生産)は、イングランドが一番高く約1,400ドル(1995)です。では他の地域はイングランドと比較してどれくらいでしょうか。

予想

- ア どの地域もイングランドとほとんど同じ(違って2割)
- イ スコットランドはほぼ同じであとはかなり(7割以下)低い
- ウ ウェールズはほぼ同じであとはかなり(7割以下)低い
- エ 北アイルランドだけがかなり低い(7割以下)
- オ そのほか

英国の地域別国民一人あたりGDP



一番低い北アイルランドとイングランドの差が年間 3000 ドル (約 30 万円) ほどですから、各地地域ともほぼ同じといえます。北アイルランドが最低なのは、政治紛争や暴動などにより治安が悪化して、経済状態が良くないためです。

[質問]

4 つの地域に分かれている英国は、地域ごとに貨幣が違うなんてことがあるのでしょうか。

予想

- ア 貨幣は全く同じ
- イ 独自の貨幣がある地方がある
- ウ 全地域とも独自の貨幣を持つ

50 種類もの紙幣が流通する国

英国の紙幣は、その大部分が英国全土で通用するイングランド銀行券ですが、そのほかにスコットランド地方の 3 つの銀行と北アイルランド地方の 4 銀行が、昔ながらの銀行券発行の特権を現在でも持っていて、それぞれが独自の紙幣を発行しています。つまり英国で流通する紙幣は次のページの表の通りで全部で 8 種類となります。

紙幣の意匠は銀行ごとに特色があります。英連邦の国々の紙幣には女王の肖像が入ったものが多いのですが、英国本土の紙幣ではイングランド銀行券にしか女王の肖像が入っていません。

スコットランドでの銀行券では、スコットランド銀行券がスコットランドの象徴を取り入れて「イングランドとは違う」と主張しているようです。

北アイルランドの紙幣では、ウルスター銀行券が親イングランド的な北アイルランドの紋章を取り入れているのがおもしろいところ です。

さらに英国王室の保護国であるガンジー、ジャージー、マン島では、英国と全く同じ通貨単位のポンドを使用していますが、原則としてそれぞれの島だけで通用する紙幣を、それぞれの政府が発行しています。(これら 3 つの地域の紙幣には英女王の肖像が入っています。)しかしこれらも全く同じ価値を持つ同じ通貨での紙幣ですから、英国全土で流通しても不思議ではありません。それで結局英国には 11 の銀行が発行する 50 種類もの紙幣が流通していることになります。

こんな国では自動販売機は全く役に立たないことでしょう。

英国の銀行券	中心的流通範囲	意匠
イングランド銀行券	全英で強制通用力	女王の肖像
王立スコットランド銀行券	スコットランド	初代の銀行総裁の肖像
スコットランド銀行券		スコットランドの象徴であるアザミの花とセントアンドリュース十字、スコットランド出身の詩人の肖像
クライスデール銀行券		20ポンド札にイングランドに勝利しスコットランドの独立を達成した王の肖像
アイルランド銀行券	アイルランド	銀行の守護女神の座像
ノーザン銀行券		北アイルランドの発明家の肖像
ウルスター銀行券		北アイルランドの紋章
ファースト・トラスト銀行券		不特定男女の肖像

別紙図版あり。

[質問]

英国の硬貨は王立造幣局が発行するものだけですが、そのデザインには工夫が見られます。どんな工夫でしょうか。

予想

- ア コインに4つの地域の意匠が全部入っている
- イ 地域を想起させるような意匠は全く使わない
- ウ 地域ごとの意匠のコインを発行している
- エ そのほか

5 種類の 1 ポンド貨

板倉聖宣「英国という王国の成立の歴史」『たのしい授業プラン歴史』(仮説社)によりますと、「英国の 1 ポンド貨のデザインには 4 種類のものがある、4 つの地域を代表させるという気の使い方をしています」ということが書いてあります。そこで『World Coins』で調べてみると、ポンド貨は 4 種類ではなく 5 種類あることがわかりました。しかも毎年違う図柄を発行する気の使いようです。

その意匠のひとつは連合王国の国章、そしてスコットランドの国花であるアザミの花、ウェールズの国章であるニラネギ、アイルランド亜麻(亜麻とアイルランドの関係はまだ不明)、そしてオークの木(イングランドを表すのか?)という順番です。それが、現在の十進法貨幣になった 1983 年から 1992 年まで、毎年繰り返されました。

1993 年からは、連合王国国章、スコットランド紋章のライオン、ウェールズ紋章のドラゴン、北アイルランドのケルト十字、イングランド紋章の 3 匹のライオン、連合王国国章、スコットランド紋章ときています。この順序で考えれば、1987 年と 1992 年の「オークの木」は、イングランドを表しているものと予想できます。

このように硬貨の中で 1 ポンド貨だけが、連合王国とそれを形成する 4 つの地域の象徴を毎年繰り返し取り入れているわけです。

(図は別紙です。)

[質問]

英国では信教の自由が保障されていますが、国家の正式教会として正式に認められている英国国教会(The Church of England)があります。では英国国教会の信者は全人口(6000 万人)のうちどれぐらいでしょうか。

予想

- ア 4000 万人以上
- イ 3000 万人ぐらい
- ウ 2000 万人以下

英国国教会の信者数

国教会というくらいですから、国民のほとんどが信者のような気もしますが、信者は170万人しかいません（「UK NOW」による）。これは全人口の3パーセント以下です。しかしこのことについて『民族の世界地図』には、以下のようにあります。

イギリスでは、選挙にあたっては信仰する宗教を申告することになっているのだが、それによると1985年、キリスト教徒全体は約700万人、そのうち国教会に属するのは約200万人だから、国教とは名ばかりのように思えてしまう。しかし国教会で洗礼を受けた数は、約2500万人となる。洗礼を受けていながら国教会ではない数、実はこの人たちがイギリス国民のごく一般的な、キリスト教徒のあり方ということができる。

表向き、イギリスは信教の自由を認めているといいながら、国そのものが『聖書』にもとづいて建国されたとの考え方が大前提としてあり、自由の範囲は、実際にはカトリックやプロテスタントというレベルであり、他の宗教、とくに外国からの移民によるイスラム教などの拡大には神経をとがらせている。就職はもちろん、学校でも差別される。（75-76ページ）

英国人と国教会との関係は、日本人が生前は仏教徒でなくても死ぬときは仏教徒になるようなものなのでしょう。

[質問]

英国国教会は英国全土に広がっているのでしょうか。それとも限られた地域だけなのでしょうか。

予想

- ア イングランドだけ
- イ イングランドとウェールズだけ
- ウ 北アイルランドを除く全英
- エ 全英

イングランド国教会

ウェールズでは1920年に英国国教会制度が廃止されたあと公認教会はありません。またスコットランドでは、長老派というスコットランドの国教会があります。北アイルランドにはアイルランド聖公会という英国国教会の支部がありますが、アイルランドはもともとイングランドの宗教の押しつけに頑強に抵抗してきたカトリック信者が多いところです。このように英国国教会というのは原文の英語の通り The Church of England=イングランド国教会と訳し直した方が良さそうです。

[質問]

英国の学校教育制度（義務教育）も4つの地域で異なっていると思いますか。

予想

- ア 4つの地域ごと異なっている
- イ イングランドとウェールズは同じ
- ウ 全土で同じ

義務教育制度

英国の義務教育は 5 歳から 16 歳までです。但し北アイルランドでは 4 歳からとなります。子どもはまず幼児学校に入り、7 歳になると小学校に進学し、11 歳で中等学校へと進みます。スコットランドでは中等学校へ進学するのは 12 歳からです。

このように教育制度はイングランドとウェールズは共通していますが、スコットランドと北アイルランドは少し違っています。

[質問]

英国には 10 の国立公園があり、そのうちの 7 つがイングランドにあります。あとの 3 つは同じ地域にありますが、それはどこでしょうか。

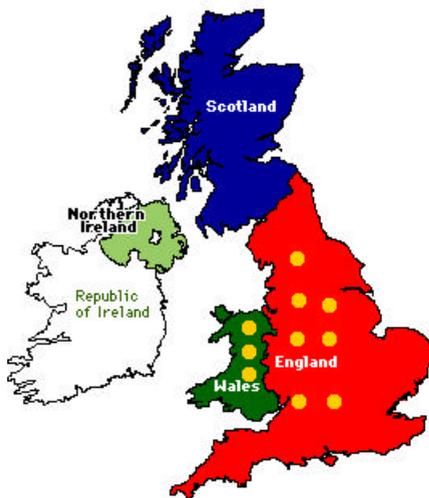
予想

- ア ウェールズ
- イ スコットランド
- ウ 北アイルランド

国立公園

10の国立公園のうち7つがイングランドにあり、残りの3つはウェールズにあります。つまりスコットランドと北アイルランドには国立公園はないのです。

しかし、スコットランドには、4つの地方公園があります。北アイルランドには、国立公園も地方公園もありません。



国立公園の名産地

[質問]

英国にも日本の「祝日」のような制度があります。法によって銀行が休みになる日は「バンク・ホリデー」と呼ばれています。

英国の4つの地域のバンク・ホリデーを含む公休日は、それぞれ違ってはいますが、イングランドと公休日が全く同じ地域がひとつだけあります。それはどこでしょうか。

予想

- ア ウェールズ
- イ スコットランド
- ウ 北アイルランド

公休日	イングランド	ウェールズ	スコットランド	北アイルランド	備考
元日					
1月2日					
グッド・フライデー					復活祭の前の金曜日でキリストのはりつけを記念する教会の祝日
聖パトリックの日					アイルランドの守護聖人
イースター・マンデー メーデー					復活祭の翌日
春のバンクホリデー					
ボインの戦闘の記念日					プロテスタントのオレンジ公がカトリックのアイルランド軍を破った戦い
晩夏のバンク・ホリデー					
クリスマス・デー					
ボクシング・デー					クリスマスの贈り物の日

バンク・ホリデー
 コモンロー（慣習法）による公休日
 その他の公休日

[質問]

英国の4つの地域の政治形態はどうなっているのでしょうか。また英国政府との関係はどうでしょう。

予想

- ア 独立した議会があり英国とは連邦関係
- イ 英国の直接統治
- ウ 連邦関係ではないが、ある程度の自治権が与えられている
- エ その他

イングランド ()

スコットランド ()

ウェールズ ()

北アイルランド ()

4 つの地域と英国

4 つの地域の政治形態は、それぞれの地域で異なります。



・イングランド

英国中央政府が直轄で治めています。

聖ジョージ十字旗は、イングランドの国旗ですが、現在は英国国教会で掲げられるだけです。

4月23日の「聖ジョージの日」にも、英国国旗が掲げられます。

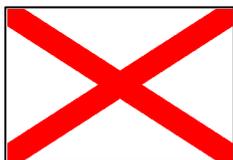


・北アイルランド

1920年にアイルランド統治法が發布され、アイルランドは南北に分割され、それぞれ自治議会が開設され、南はその後アイルランド共和国として独立し、北アイルランドは連合王国に残りました。北アイルランドは、英国政府に外交権と国防権だけを委ねた連合王国内の自治国家として成立したのです。

しかし英国との連合を望むプロテスタントとアイルランドの統一を願うカトリックとの争いでテロが頻発し、事態の沈静化を願う英国軍が治安維持のため駐留する事態となり、1972年には英国が北アイルランドの自治体制を停止して直接統治に移行しました。その後、1973年に北アイルランドに行政権が戻され、新行政府が英国政府の強力な指導のもと1974年1月に発足しましたが、プロテスタント系住民はゼネストなどで猛反発し、新体制は5月に崩壊しました。7月には「北アイルランド法」が制定され、暫定的な直接統治の中で、北アイルランド制憲会議を設けて自治体制の検討が現地住民の自主性にゆだねられたのですが、カトリックとプロテスタント両派の確執により会議は1976年に解散してしまい、英国政府の直接統治に戻りました。その後もテロや武力闘争が続きましたが、2000年になってようやく両者の和解が成立し、5月に自治政府が機能し始めました。まだ駐留英国軍の撤退、アルスター警察（北アイルランドの警察隊でほとんどがプロテスタント）の改革問題やIRA（Irish Republican Army=アイルランド共和国軍、アイルランドの統一へ向けて武力闘争をする）の武装解除問題が解決していませんが、和平への確実な歩みは続いています。

・北アイルランドでの旗について



聖パトリック十字旗

アイルランドを示すという聖パトリック十字旗は、政治問題に巻き込まれたくなく、中立（「英国との連合」でも「アイルランド統一」でも「独立」でもない）の立場を示す教会で掲揚される他は、公式にはどこでも使われません。つまり「北アイルランドの旗」というのはなく、北アイルランドでは英国国旗を使います。



北アイルランド国旗

これは、北アイルランド政府が紋章として 1953 年から使用した意匠の一部を旗にしたもの。この旗は 1973 年に廃止され、以降は英国国旗を使用することとなった。しかし、北アイルランドのサッカーチームは、試合の時にこの旗を現在でも使用している。

・スコットランド



イングランドとの 1707 年の連合によりスコットランド議会は消滅しました。しかしスコットランドは、イングランドと共通の王を持つ対等の国ですから、独自の法体系を持つなど、広範囲の自治権を持っています。英国政府のスコットランド省の大臣がスコットランド政庁を通して、政策立案と行政に責任を持っています。その後 1997 年の住民投票により議会の復活が決定、1999 年にはその議会選挙が行われました。この議会は、現在スコットランド省の大臣によって行使されているのと同じ権限をもち、法律を制定し、所得税の基本税率を最大 3% だけ上下させることができるようになります。

（聖アンドリュー十字旗は、スコットランドの国旗です。）

・ウェールズ



ウェールズは、早くにイングランドと統合されたためか、行政区分では「イングランドとウェールズ」のようにいつも一緒にされています。しかしウェールズにもスコットランドほどではないにしろ、一定の自治が認められています。

英国政府のウェールズ省の大臣がウェールズ政庁を通して、司法や警察消防などを除いた地域行政をしています。1997年の住民投票により、ウェールズ議会の復活が決定し、1999年にはその議会選挙が行われました。この議会はウェールズの関心問題を討議し、現在のウェールズ省の予算に責任をもちますが、法制度についてはイングランドと同じ制度を維持します。

(赤竜旗は、ウェールズの国旗としての使用が認められている。)

[質問]

次の国または地域の市民で英国の国会議員選挙に選挙権があるのはどれでしょうか。

- | | |
|------------------------------------|--------------------------------------|
| <input type="checkbox"/> イングランド市民 | <input type="checkbox"/> スコットランド市民 |
| <input type="checkbox"/> ウェールズ市民 | <input type="checkbox"/> 北アイルランド市民 |
| <input type="checkbox"/> 英連邦構成国の市民 | <input type="checkbox"/> アイルランド共和国市民 |
| <input type="checkbox"/> 英王室保護国の市民 | |

選挙権

英国では下院議会の選挙権が 18 歳以上の英国市民と英国在住の英連邦構成国の市民,そしてアイルランド共和国の市民に与えられています。また 21 歳以上の英国市民と英連邦市民,アイルランド共和国の市民には被選挙権が与えられています。国を越えて選挙が行われることには驚きます。

[質問]

英国はサッカーの発祥の地で,サッカーがとても盛んです。それで 4 つの地域ごとに国際サッカー連盟に加入する協会があります。それでは英国はオリンピックのサッカーには,どんな形で参加しているでしょうか。

予想

- ア ひとつのナショナル・チームを作って参加
- イ それぞれの地域が別々に参加
- ウ イングランドとスコットランドだけが参加
- エ オリンピックには参加していない

統一チーム

英国は 1972 年以来オリンピックには参加していません。英国にあるオリンピック委員会はひとつだけですので、英国代表 1 チームの参加しか認められないのに、4 地域のチームはそれぞれがナショナル・チームとして出場したいと考えているからです。

同様にホッケーでもスコットランド、イングランド、ウェールズのチームがあり、別々に国際大会に出場しています。ラグビーでは、統一チームを作っていますが、それには英国の 4 つの地域だけでなくアイルランド共和国も含まれています。

[質問]

英国は EU (欧州連合) に加盟していますが、EU における英国代表には地域の代表も入っているのでしょうか。

予想

- ア 英国政府代表のみが参加
- イ 地域ごとの代表のみが参加
- ウ 英国政府と 4 地域の代表が参加

EU と英国のこれから

EU の英国代表は、英国政府代表と、4 つの地域のそれぞれの代表 5 名から構成されています。英国の 4 つの地域は、これまでも見たように地域議会を創設し独立の方向へ向かっているように感じられます。また北アイルランド問題は、まだ解決の糸口も見えません。英国政府は 4 つの地域をひとつにするために苦心していますが、英国が真にひとつの国になることは、これからのないことなのかも知れません。しかし、ひとつの可能性はあります。それは EU です。EU は英国というひとつの国の枠を越えて、ヨーロッパ全体がひとつになる可能性を見せてくれているのですから。

文献

- ・ Flags Of The World
<http://www.ace.unsw.edu.au/fotw/flags/index.html>
- ・ 「UK NOW」 英国の公式情報サイト
http://www.uknow.or.jp/uk_now/content1.htm
- ・ 板倉聖宣 「英国という王国の成立の歴史」
『たのしい授業』 No.136 仮説社
- ・ 出口保夫ほか 『イギリスの生活と文化事典』 研究社出版 1982
- ・ 『目で見える世界の国々』シリーズ 『イングランド』『ウェールズ』
『スコットランド』『北アイルランド』 国土社 1997
- ・ 植村峻 『世界紙幣図鑑』 日本専門図書出版 1999.4
- ・ 小学館 『スーパー・ニッポニカ ライト版』
- ・ システムソフト 『研究社リーダーズ英和辞典』
- ・ Chester L. Krause 他
『2001 standard catalog of WORLD COIN』
krause publications

文献についての詳細はホームページでどうぞ。

仮説ネット <http://www.ne.jp/asahi/kasetsu/net/>
ご意見ご感想をお寄せください。

丸山 秀一 kasetsu.maruyama@nifty.com